



永田 円了
真国寺住職



強くなりたかった。末っ子長男、姉三人の環境では、どうみても強さが育つ心配はなかった。禅僧の父も、一人で孤独を樂しむことこそあれ、世間に何かを主張する人ではなかった。中学生になって、身体が弱く貧血症で1ヵ月入院。そのときですら、父から私に、実は密かに期待していた「強くなれ」の言葉はなかった。母はただ毎日、レバーを煮込んだ弁当をせつせとつくってくれた。

教員になると、学生たちにも強さを求めた。グループワークで人の輪に入れない学生を、何

人の強さと弱さ

とか入れるよう強く指導した。でも、何かがおかしいと感じた。果たして強さで引張る教育に何の効果があるのだろうか。何か自分でもできないことを、人に強要しているのではなにか、と感じ始めていた。

あるとき、お寺に二児の母親が相談にみえた。家庭内の問題で世間の目を必要以上に気にされておき、私は思い切って言った。

「何言っているんですか。人間はみんな問題があつて当たり前じゃないですか。私だって今女房と別居中なんですよ！」

その瞬間女性の表情が一変した。まさか寺の住職がそんな問題を抱えているとは思ってもしなかったのだろう。ため息を吐いて言った。「ええ、そうなんですか……」。何か地獄で仏に会ったかのような安堵感が彼女の目に流れ始めたのが分かった。

人間の脳には、共感回路があり、それは人が自分の弱さをさらけ出したときに活動するといふ。できればありのままの自分をさらけ出したい。しかし見えない壁が邪魔をする。壁というと、人と人との間にあると思われがちだが、実はその壁は心の中にあるもの。さらけ出すとは、自分の心の中の壁を崩すことである。

生誕100年を迎え、木下恵介の作品が世界の注目を浴びている。「二十四の瞳」で代表される木下映画は、人間の弱さをありのままに描いている。

「先生もどうしたらいいか分からない。泣きたい時はいつでもいらっしやい。先生も一緒に泣いたげる」。高峰秀子演じる先生像は、人間のもつ弱さを、たとえ先生であっても隠さず生徒の前にさらけ出した。

子どもの頃、強くなりたいと思っていた。しかし、強さとは何だったんだろうか。人より自分が勝ることなのか。どうも違う。逆に、この弱き自分を謙虚に受け入れたとき、強さはおのずから現れてくるような気がする。

心の壁壊しさらけ出せ